

煩惱

水野大雅

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
煩惱はおそらく丸し蜆汁	たこ焼きに楊枝二本や水ぬるむ	まなぶたの厚き人形紫木蓮	恋猫の大聖堂でありしかな	大八を曳き早梅の道となる	塵箱を持つ役貰ふ春支度	鶴鳴くや人にもつとも遠き湖	うづまきに珈琲豆を挽く寒夜	餅花のひとつはづれてしまひけり	そのことは言はないでおく聖樹過ぐ	手袋がほんたうの手にしたがはぬ	父らしき人の外套離れて子	タクシーが駅に一台浮寝鳥	肉の字に人の重なる開戦日	花枇杷やラスクの粉が膝頭	からすみの色うつとりとなつてきし	丸首よりぬんと頭や暮の秋	夕鵲や朱肉は印に叩かれて	木犀が喪服の人の肩に散る	毒茸に毒茸らしき笠の反り	十月や木匙に掬ふ鳥の餌	場違ひな門場違ひな花カンナ	両の掌に開く本堂虫時雨	輪中一周赤蜻蛉赤蜻蛉	道場に風よくとほる帰燕かな
26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
入学の握れば櫂の太きかな	丸腰のまま菜の花へ入りにけり	まひるまの花食ふ鳥の奥に鳥	南吉に濃き眉のある春田かな	亀鳴くや伽藍に人のあらはれず	自画像の鼻が嫌ひで葱の花	薊抜く何もなかつたやうに抜く	投網打つ音やはらかき朝寝かな	革張りのソファアの皺や百千鳥	君の名に草冠や夏立ちぬ	鯉のぼり口を正しく吹かれをり	菖蒲湯の菖蒲貼りつく肩の肉	そのうへの風は放恣や立葵	おにぎりは草笛の徒の過ぎてより	老鶯や無言で済ます僧の礼	紫陽花の首を載せたり漆盆	こんなにも太き胡瓜の果てに花	ただならぬ蛆の白さでありにけり	梅雨明けの傘もて未来走り書き	峰雲や校長室の帽子掛	梅酒注ぐ晩年の色こんな色	饅飯やぬるき受話器を戻しおく	火蛾廻る誘導員の赤き棒	夏痩せて降車ボタンのうすあかり	にんげんを諦めてゐる海月かな